

『赤い鳥』のなかのグリム童話(2)

Grimm's Fairy Tales from the Children's Magazine *Akai Tori* (2)

野口 芳子

NOGUCHI YOSHIKO

要旨

『梅花児童文学』30号(2023年3月)の拙論では、『赤い鳥』のなかにはグリム童話由来の話が9話存在することを明らかにした。また、先行研究でグリム童話由来とされていた13話のうち、そうではないものが8話あると明記した。しかし、その理由については詳述していない。本論の目的は、先行研究で渡辺茂男が指摘した7話のうち6話が該当しない理由、王玉が指摘した10話のうち5話が該当しない理由、佐藤宗子が指摘した1話が該当しない理由について詳述することである。さらに上記の拙論でグリム童話由来と判断した9話について再点検することである。その結果、グリム童話由来の話は9話ではなく、8話であることが判明した。なぜなら、「蠟燭をつぐ話」はグリム童話ではなく、チェコスロバキア昔話に基づいた話であることが判明したからである。

Abstract

My previous article in *The Baika Journal of Children's Literature* (No.30.2023) revealed that there are nine stories in *Akai Tori* that were adapted from *Grimm's Fairy Tales*. Additionally, eight of the thirteen stories whose origin had been attributed to *Grimm's Fairy Tales* in three previous studies, did not correspond. However, the reasons for this are not detailed

This study documents the reasons six of the seven stories highlighted by Shigeo Watanabe, seven of the ten stories identified by Yu Wang, and one story featured by Muneko Sato do not correspond. I also re-examined the nine stories pinpointed in my previous work as having been adapted from Grimm's Fairy Tales.

The results revealed that eight, not nine, stories derive from *Grimm's Fairy Tales*. The reason for this result is that "The story of the candle being refilled" was not from a Grimm's fairy tale but from a Czechoslovakian folktale.

Key Words

赤い鳥 グリム童話 再話 底本 先行研究

Akai Tori (The Red Bird), *Grimm's Fairy Tales*, Retelling, Original Text, Previous Studies.

序論

『梅花児童文学』30号の拙論で¹、『赤い鳥』のなかにはグリム童話由来の話が9話存在することを明らかにした。その際、先行研究でグリム童話由来とされていた13話のうち、グリム童話由来であるのは5話のみであり、8話はそうではないとして表に「✕印」をつけた。渡辺茂男が指摘した7話のうち6話が該当せず【表1】、王玉が指摘した10話のうち5話が該当しない【表2】。佐藤宗子が指摘した1話については文中と注でグリム童話の話ではないと明記した【表3】。しかし、判断した理由については詳述しなかった。論文の紙幅の都合上省略せざるを得なかったからだ。

本論の目的は、まず、上記の拙論(1)の続編として、グリム童話由来ではないと判断した理由について詳述することである。また、拙論(1)でグリム童話由来と判断した9話について再点検し、『赤い鳥』で使用された底本について再調査することである。さらに、改変の特徴に注目して、その意図について探ることである。

なお、ここで使用するテキストは『赤い鳥』の冊子であって、『鈴木三重吉全集』に収録されているものではない。

第1章 先行研究でグリム童話由来と判断されている話

1. 3人の先行研究

『赤い鳥』に収録されている話の出典がグリム童話であるか否かについて論じたものは、論文が2本と著書が1冊存在する。渡辺茂男著「『赤い鳥』と外国文学」²と、王玉著「雑誌『赤い鳥』における『殺す』『殺される』問題：欧米昔話再話作品を中心に」³と、佐藤宗子『家なき子の旅』⁴である。グリム童話が出典とされているのは渡辺では7話、王では10話、佐藤では1話だが、重複している話が4話存在するため、合計14話である。そのうち、拙論(1)でグリム童話ではないと判断した話は、渡辺では6話、王では5話、佐藤では1話である。それらの話を表にまとめると下記のようなになる。

2. 3人の先行研究の表化

1) 渡辺茂男の指摘【表1】

No	年月	巻号	作(訳)者	『赤い鳥』収録題名	出典	注記	当否
①	1918.9	1-3	佐藤春夫	蛙の王女	グリム	通信欄 記者回答	✕
②	1918.12	1-6	丹野てい子	命の水	グリム		✕
③	1919.1	2-2 特	鈴木三重吉	悪い狐	グリム民話		✕
④	1919.1	2-2 特	丹野てい子	石臼と鹽の話	グリム・北欧民話		✕
⑤	1919.3	2-3	丹野てい子	どんぐり小坊主	グリム	親指小僧の翻案	✕
⑥	1919.4	2-4	丹野てい子	がらすの山	グリム		✕
⑦	1919.4	2-4	島崎藤村	小さな土産話 兎と針鼠	グリム		○

2) 王玉の指摘【表 2】(渡辺の指摘【表 1】と重複している場合はその番号も併記)

No	年月	巻号	作(訳)者名	『赤い鳥』収録題名	出典	注記	当否
⑧	1918.11	1-5	野上豊一郎	ボビノが王様になった話	グリム		○
⑨	1918.11	1-5	鈴木三重吉	馬鹿	グリム		✕
⑩②	1918.12	1-6	丹野てい子	命の水	グリム		✕
⑪	1919. 1	2-2 特	野上豊一郎	灰色の小人	グリム		✕
⑫④	1919. 1	2-2 特	丹野てい子	石臼と鹽の話	グリム		✕
⑬⑦	1919. 4	2-4	島崎藤村	小さな土産話 兎と針鼠	グリム		○
⑭⑥	1919. 4	2-4	丹野てい子	がらすの山	グリム		✕
⑮	1919.5-6 1919. 7	2-5, 6 3-1	久保田万太郎	白い鳥の話(上・中・下)	グリム	3巻1号を2巻7号と誤記	○
⑯	1921. 9	7-3	小山内薫	イルゼベルの望み	グリム		○
⑰	1924. 2	12-2	小野浩	正直もの	グリム		○

3) 佐藤宗子の指摘【表 3】

No	年月	巻号	作(訳)者名	『赤い鳥』収録題名	出典	注記	当否
⑱	1919.1-3	2-2, 3	小山内薫	平気の平左	グリム	日本化した翻案	✕

第 2 章 先行研究の判断が妥当でないとした理由

1. 渡辺茂男の場合

1) ①1918(大正7)年9月1巻3号 佐藤春夫訳「蛙の王女」

1918年11月号の通信欄に記者が「あれは Grimm の Fairy Tale の中にある話です」と記載しているので⁵、グリム童話とされたのであろう。しかし、この話はグリム童話ではない。丸尾美保は「ロシア民話の『蛙の王女』と類似しているためロシア民話からの再話と考えるのが妥当である」としている⁶。以上の理由は拙論(1)でも述べている。

『アフナーシェフ ロシア民話集 下』に収録されている「蛙の王女」では⁷、末の息子はイワン、蛙の王女はワシリーサであるが、佐藤訳でもイワンとワシリーサである。王が息子たちに課した1番目の課題は「白パン」を作ることだが、佐藤訳では「菓子」になっている。2番目の課題は「絨毯」を織ることだが、佐藤訳では「襦袢」になっている。ロシア民話ではイワンが蛙の皮を焼いてしまい、白鳥に変身したワシリーサを探し出すエピソードが続くが、佐藤訳では省略されている。

1899年にイヴァン・ヤーコヴレヴィチ・ビリービン(Ива́н Я́ковлевич Били́бин, 1876-1942)が美しいアールヌーボー様式の挿絵を入れたロシア昔話集『蛙の王女』の絵本を出版している⁸。その英訳本を利用したのだろうか。それともモーリス・ベアリング(Maurice Baring, 1874-1945)の『青いバラの童話』(*The Blue Rose Fairy Book*)に収録されているロシア民話「賢い王女」(*The Wise Princes*)が底本であろうか⁹。いずれにしる、この話の出典はロシア民話であり、グリム童話ではない。

訳者の佐藤春夫は和歌山県新宮市出身で、慶應義塾大学文学部で永井荷風に師事する。『赤い鳥』には「いたずら人形」と題して「ピノチオ」を訳出している¹⁰。

2) ②1918 (大正 7) 年 12 月 1 巻 6 号 丹野てい子訳「命の水」

この話の内容はグリム童話「命の水」の内容ではなく、ラングの『ももいろの童話集』(*The Pink Fairy Book*)¹¹に収録されている「命の水」の内容である¹²。グリム版では王の病気を治すため「命の水」を探しに行く 3 人の息子の話であるが、ラング版では 3 人の息子が力を合わせて建立した宮殿に欠けた 3 つのもの(命の水、話す鳥、美しい花が咲く木)を入手しようと、3 人の息子が旅に出る話である。3 人の兄は登山の途中で振り返ったため石にされてしまうが、妹は振り返らず無事に山頂に到着し、3 つのものを手に入れる。妹がまわりの石に「命の水」をかけると、すべての石が人間の姿にもどる。丹野訳はラング版の話を踏襲したものだが、結末のみ大きく改変されている。ラング版では宮殿にある宝物を手に入れた勇氣ある妹の行動に感動した王子が妹に求婚し、「二人は永遠に幸せに暮らしました」で終わる。一方、丹野訳では「四人の兄弟は、その御殿にいつまでも／＼楽しく仲よく暮らしました」で終わる。結婚による男女の幸せを兄弟愛による幸せに置き換えているのである。ラングは出典を「ラブロス博士によるカタルーニャ民話」(バルセロナ 1885 年出版)であると明記している。

なお、鈴木三重吉童話全集 6 巻に同名の話が収録されているが、内容はこの話とは異なる。偉大な王が家来の入手した「命の水」を飲まず、大地に撒いて全員の命の救済を願うというもので、イギリスの小説家シャーロット・ヤング(Charlotte Mary Yonge 1823-1901)の話の再話したものである。同じ「命の水」という題名で三重吉のものが存在するということは、この話は三重吉ではなく丹野てい子が訳して再話したのかもしれない。

3) ③1919 (大正 8) 年 1 月 2 巻 2 号 (特別号) 鈴木三重吉訳「悪い狐」

この話は、鈴木三重吉童話全集 2 巻にも「わるい狐」という題で収録されており、三重吉は附言で出典を「ノールウェイ・アスビョルンセン作」と明記している¹³。つまりこの話はノルウェー民話、ピーター・クリステン・アスビョルンセン編の本(1874年)から収録したものだというのだ。調査の結果、『フィヨルドからの物語 アスビョルンセン編 北欧の民話シリーズ』に収録されている次の話であることが判明した¹⁴。『北欧の民話シリーズ』のなかの『ピーターの動物談』に収録された「豚肉と蜂蜜」という話である¹⁵。

熊が持つ豚肉と狐が持つ蜜蜂の巣を競争に勝ったものが先に味わえることにしようと狐が提案する。三重吉訳では競争の課題は 3 つの「虫の名」を挙げることだが、アスビョルンセン版では「木の名」である。競争に勝った狐が食べるのは「豚肉」だが、アスビョルンセン版では「豚の心臓」である。激怒した熊に狐は蜂の巣を渡すが、それはミツバチではなくクマバチの巣で、熊は散々蜂に刺されて泣きながら転げまわる。それを見て狐は喜ぶ。「ほんとに狐は悪い奴です」で終わる。

アスビョルンセン版ではクマバチではなくスズメバチの巣で、熊のブルーインは耳と目と口と鼻を散々刺される。「だから、あの日以来、ブルーインはスズメバチを極度に恐れているのです」で終わる。三重吉訳では狐の悪者ぶりが強調された話になっているが、アスビョルンセン版では熊がスズメバチを恐れる所以を説いた話になっている。結末は改変されているが、内容はアスビョルンセン編「豚肉と蜂蜜」の話を踏襲したものである。

4) ④1919 (大正8)年 1月 2巻2号 (特別号) 丹野てい子訳「石臼と塩の話」

この話の出典は上記と同様、アスビョルンセン編『北歐の民話シリーズ』に収録されている「海底で塩を挽き出す石臼」であり¹⁶、ラング版『あおいろの童話集』に収録されている「なぜ海は塩辛いのか」である¹⁷。

丹野訳では貧しい弟がクリスマスのための食糧を貸してくれと兄に頼むと、金持ちの兄は吝嗇で、ハムを少し渡して、これ以上は悪魔に(ラング版では「死者の部屋」〔Dead Man's Hall〕で)もらえという。アスビョルンセン版では兄は弟に「地獄」〔hell〕に行くと、もっとやるという。悪魔の家の前で弟は老人から、悪魔はハムを欲しがすが、石臼と交換でなければ渡してはいけないと助言される。その石臼は何でも挽き出す魔法の石臼である。弟は石臼で御馳走を沢山引き出して、兄や村人を招待する。金持ちの兄は高いお金(ラング版もアスビョルンセン版も 300 ドルと明記)を払って無理やり弟から石臼を買い取る。兄は石臼で「ソップ」(ラング版では「ニンジンとミルクポタージュ」、アスビョルンセン版では「ニンジンと粥」)を挽きだすが、止め方がわからず、あたり一面スープだらけになる。兄は弟に石臼を返し、金も返してもらおう。ラング版やアスビョルンセン版では、弟は兄にさらに 300 ドル払わないと止め方を教えないし、石臼も引き取らないと言う。丹野訳の弟は金銭欲のない非の打ち所のない善人に改変されている。しばらくして石臼の噂を聞いた船長が来て、石臼から塩も出せるかと聞く。船長は夜中に石臼を盗んで自分の船に運び、塩を大量に出すが、止め方がわからず、船は塩の重みで沈んでしまう。それで海の水は塩辛いのだ、で話は終わる。ラング版やアスビョルンセン版では船長は盗むのではなく、何千ドルも出して石臼を買う。主人公の弟は石臼で大金持ちになるが、丹野訳では弟はお金を受取らず、お金に執着しない人間として描かれ、逆に船長は数千ドルで買っているのに、盗んだことにされている。善人を無欲で金銭欲のない人間に、悪人を金銭欲の強い人間に改変しているのである。石臼から挽き出した食べ物の止め方がわからず、あたり一面に食べ物が広がるモチーフ(ATU565)のみ、グリム童話「甘い粥」(KHM103 Der süße Brei)と一致するが、話の内容はまったく異なる。

5) ⑤1919年 3月 2巻3号 丹野てい子「どんぐり小坊主」

この話は桑原三郎著『鈴木三重吉の童話』では鈴木三重吉が丹野てい子の名で掲載したもので、出典は不明とされている¹⁸。渡辺茂男は「グリムの親指小僧の翻案」としているが、話の内容は大きく異なる。

グリム版の親指小僧は親の家を出てから泥棒の手先となり、牛や狼に食べられ、胃袋の中から大声で叫び父親に助け出される。丹野訳のどんぐり小坊主は 15 歳になると、「使い走り」の仕事を立派にこなし、馬泥棒を退治する。20 歳になると、彼はコウノトリに乗って世間に出ていく。利口で活発な小坊主は王様に気に入られ、大きなダイヤモンドをもらう。それを持って家に帰り、両親が大金持ちになるという話である。

この話はラングの『きいろの童話集』に収録された「ヘーゼルナッツの子」〔The Hazel-Nut Child〕と内容が酷似している¹⁹。「ヘーゼルナッツ」の邦訳は「ハシバミ」であるが、丹野は「どんぐり」に改変している。小さいが非常に賢い彼は、15 歳のとき「使い走り」になると言う。その仕事を普通の人より短時間でこなし、馬泥棒を捕まえ、役人に引き渡す。20 歳のとき、コウノトリに乗って世間に出ていく。ちびで賢い小僧は王に気

に入られ、自分の体の4倍もある大きなダイヤモンドをもらう。その宝物で両親は死ぬまで何不自由なく幸せに暮らす。

ラングは出典を“From the Bukowniaer. Van Wliolocki”と短く記載している。つまり、ポーランド系ドイツ人学者、ハインリヒ・フォン・リスロッキ（Heinrich von Wislocki 1856-1907）が編集した『ブコヴィナおよびトランシルヴァニア地方のアルメニア伝説と昔話』²⁰から採用した話なのである。リスロッキの上記の本に収録されているドイツ語版「ヘーゼルナッツ子ども」〔Das Haselnußkind〕の話は、ラング版「ヘーゼルナッツの子」とほぼ同じ内容のものである。しかし、1点だけ下記の点が異なる²¹。

ラング版では「普通の人が1分でいける距離を、おまえの小さな足では1時間かかる」と表現されているが、リスロッキ版では「普通の人が15分で行ける距離を、お前の小さな足では1時間かかる」となっている。丹野（三重吉）訳ではラング版と同じ表現になっているので、この話はリスロッキ版ではなく、ラング版を訳出したものであるといえる。

6) ⑥1919（大正8）年4月 2巻4号 丹野てい子訳「がらすの山」

この話は、ラングの『きいろの童話集』に収録されている「ガラスの山」をほぼ忠実に訳したものである²²。ラングは出典を「ポーランドの昔話、クレトケ」〔From the polish. Kletke〕と表示している。ベルリンで1845年に出版された下記のドイツ語本が出典であろう。ヘルマン・クレトケ（Hermann Kletke 1813-1886）著『メルヒェンの部屋』〔Märchensaal〕、副題『子どもと大人のための世界の民族の昔話』〔Märchen aller Völker für Jung und Alt〕である²³。ラング版との相違は若者が山に登るのに手足につける爪が、ラング版と丹野訳では「猫」の爪であるが、クレトケ版では「狐」の爪である。また丹野訳では「若者のポリツシ」であるが、ラング版では「徒弟」で、クレトケ版では「靴職人の徒弟」とされている。若者は王女と結婚してガラスの山の強い統治者になるが、「彼は決してこの世に戻ることはなかった」という表現が、ラング版〔But he never returned to the earth〕とクレトケ版〔Doch auf die Erde kehlte er nicht mehr zurück〕には存在するが、丹野（三重吉）訳には存在しない。また、結末も異なる。ラング版とクレトケ版の結末は、ガラスの山で石にされた人々が全員、驚の血によって蘇ったので、驚き喜んでいいるが、丹野（三重吉）訳では、「さて、かうしてポリツシは金のお城の殿さまになりました。お城にある家来達は、あすはポリツシ様とお姫様との御婚禮のお祝ひがあるのだと言って、皆で大騒をしてをります」と改変されている。

2. 王玉の場合

1) ⑨1918（大正7）年11月 1巻5号 鈴木三重吉訳「馬鹿」

桑原三郎の前掲書では出典は不明とされているが、調査の結果、この話の出典はラングの『だいだいの童話集』に収録されている「馬鹿な職工」〔The Foolish Weaver〕²⁴であると推測する。Fairytale.com.では‘The Foolish Weaver’はラングの本に収録されており、インド民話であると明記されている²⁵。

三重吉訳では若者（ラング版 職工）が、百姓に羊の番人として雇われる。もし、狼（ラング版 豹）でも何でも出てきたら、石を投げて追い払えと言って、窓の下にある石をつかんで投げつける真似をする。若者は了解して、羊を丘に連れて行って草を食ませる。ふ

いに狼が 1 匹現れたので、若者は大急ぎで走って帰り、窓の下の石を攫んで戻り、狼に向かって投げつける。しかし、その間に狼は羊を 2、3 匹喰い散らかして逃げてしまう。その話を聞いて百姓は若者の馬鹿さ加減にあきれる。(ラング版 百姓は若者をこっぴどく打ちのめす)。今度は病気の祖母の番をして蠅を追い払うよう命じられる。蠅が祖母の手にたかったので、若者はそばにある皿(ラング版 石)を手にとって蠅に投げつける。皿は祖母の手にも当たり、祖母は痛くて目を回してしまう。(ラング版 近くにある大きな重い石を蠅に向かって投げつけたが、運悪くかわいそうな祖母に当たってしまう)²⁶。若者は驚いて(ラング版 百姓に怒られるのが怖くて)²⁷、家を逃げ出す。6 人の人(ラング版 職工)に出会い、仲間にしてもらう。川を渡ってから人数を確認すると、6 人しかいない。みんな自分を数えるのを忘れたからだ。通りかかった百姓がひとりずつ確認し、7 人いることを確認すると、「この人は六人の人間を七人に殖したぜ。それはきつと魔法使に違ひない」と言って、怖くなって「素ツ裸でどん／＼遁げて行きました。」この部分はラング版では、「職工たちは明らかに 6 人なのに、7 人に増やした人を魔法使いと見なして感謝した」となっている²⁸。「感謝した」というラング版の表現を、三重吉は怖くなって逃げ出したと改変している。全体的に見て、話の内容が酷似しているので、三重吉はラング版の話を訳出し、改変したものと判断する。

2) ⑩1919 年 1 月 2 巻 2 号(特別号) 野上豊一郎訳「灰色の小人」

この話はラングの『はいいろの童話集』に収録されている「灰色の小さな男」[The Little Gray Man]と同じ内容のものである²⁹。修道女を尼さんに変えているくらいで、田舎者と鍛冶屋は同じである。ラングが出典としているクレトケ版では「灰色の小人」[Das graue Männchen]という題名で、田舎者[countryman]は鉱夫[Bergmann]とされている³⁰。森の中のあばら家で 3 人が共同生活し、そこに小人がやってきて、仲間のために作った料理を全部食べてしまったので苦情を言うと、小人は激怒して相手を殴り倒す。鍛冶屋だけが殴られず、逆に、3 つある小人の首のうち 2 つを槌で切り落とす。3 人は灰色の小人を探しに出かける。古びた城にたどり着き、広間に入ると 2 人の姫に感謝される。小人の 2 つの首が落ちたとき、彼女たちの魔法が解けて解放されたからだ。地下の宝を守る番犬を鍛冶屋が槌で殺すと、呪いが解け王子が現れる。王子は修道女と、鍛冶屋と田舎者はそれぞれ姫と結婚して、宝物を山分けしてみんなで幸せに暮らす。野上訳とラング版では宝物の詳細についての記載はないが、クレトケ版では宝物はドイツ語で「金と銀」と明記されている。野上はラング版から採用し、ラングはクレトケ編『メルヒェンの部屋』から採用した話である。『メルヒェンの部屋』には「大人と子どものための世界の昔話」という副題が付けられていて、どの国の昔話であるかが目次に明記されている。この話はドイツの昔話とされているが、グリム童話集には収録されていない。

再話者、野上豊一郎(1883-1950)は大分県出身の英文学者であり、能楽研究者である。三重吉と同時期に東京帝国大学英文学科を卒業し大学院に進学した学究肌の人物である。三重吉同様、夏目漱石の門下生として創作し、『赤い鳥』にも多くの投稿をしている³¹。

3. 佐藤宗子の場合

1) ⑱ 1919(大正 8)年 1-3 月 2 巻 2-3 号 小山内薫「平気の平左」

この話はグリム童話「怖がることを知りたくて旅に出た男の話」であると、佐藤宗子が指摘している³²。『赤い鳥』の読者から「もっと日本固有のものをお取り扱い下さい」³³という投書があったのでそれに対応したものだといふのだ。題名、時代背景、登場人物などからはグリム童話であるとは想像できないが、話の内容を読むと、グリム童話の上記の話の翻案であることがわかると書いている³⁴。調査の結果、この話の内容はグリム童話集に収録された話ではないということが判明した。

グリム童話「怖がることを学びに旅に出た男の話」〔KHM4 Märchen von einem, der auszug, das Fürchten zu lernen〕の梗概は下記である。

親に頼まれて、堂守が幽霊に扮装して息子を脅すが、息子は怖がるどころか堂守を階段から突き落とす。首吊り台の死刑囚と共に夜を明かしたり、呪われた城で 3 日間、夜間の見張りをして犬や猫や死体と闘ったりするが、ぞっとしない。見張りに成功して城を呪いから解き放った息子は、王から王女との結婚が許される。結婚後も「ぞっとしたい」と言い続ける夫に、妻は寝床で「雑魚がうようよ泳いでいる冷水」を浴びせかける。夫は大声で「わあっ、ぞっとする」と言って、初めて「ぞっとするとは、こういうことだったのか」と納得する。

「平気の平左」の話は、イエイツ編『アイルランドの昔話』(London 1892)に収録されている「怖がることを知らなかった男」〔The man who never knew fear〕(ダグラス・ハイドによるゲール語からの翻訳)とほぼ同じ内容である³⁵。小山内訳では恐がり源兵衛(イエイツ版 ローレンス)と平気の平左(イエイツ版 キャロル)という 2 人の兄弟がいて、平左は決して怖がることがなかった。母親が亡くなったので、子どもが墓の番をすることになる。平左は怖いものがないので墓番を引き受ける。1 日目は夜中に体のない大きな黒い人間の首が現れる。2 日目は大きな黒いものが墓を掘り返すので切り捨てる。3 日目は長い歯を持つ白い首が現れたので刀で切ろうとすると、お前は母の死体を助けた「日本一」(イエイツ版 「アイルランド一」)強い男だから、大金持ちになると予言する。平左はお金を持って諸国見物に出る。怖いところなら墓場(イエイツ版 教会)に行け、証拠に茶碗(イエイツ版 杯)を持って帰れとパン屋に言われる。黒い山羊が現れ、刀で切ると、あたり一面血だらけになる。悪霊を退治したのだ。平左の胸の中に鞆が入ったと思ったら人間の首だった。恐くないかと聞かれて、恐くないと言うと、すべてが消え去る。大きな家に泊まると、夜中に牛と馬が相撲を取る(イエイツ版 戦う)。平左は平気でぐっすり眠っている。2 日目は黒い山羊が 2 頭で相撲を取る(イエイツ版 戦う)。3 日目は白髪頭の爺さんが来て、おまえは日本一(イエイツ版 アイルランド一)強い男だから持ち金をやる。俺の娘を女房にしろという。娘はいろいろもてなしをして(イエイツ版 娘は恋に落ちて)平左と結婚する。「平気の平左は平気で生きてゐたやうに、平気で死にました」(イエイツ版 彼は生きていたときと同じように、何も恐れることなく死にました)〔He died as he lived, without there being fear on him〕で終わる。「平気の平左」の内容はイエイツ版の「怖がることを知らなかった男」の話を踏襲したものである。それゆえ、この話の出典はグリム童話ではなく、イエイツ版「アイルランドの昔話」である。

第3章 出典としての使用文献の傾向

1. グリム童話由来でない話の出典文献一覧表【表4】

No	作者名	収録題名	文献 編著者	文献の題名	出典国
①	佐藤春夫	蛙の王女	M.ベアリング 青いバラの童話 I.・ビリービン	アフナーシェフ昔話 英訳（ベアリング訳） ロシア昔話の絵本	ロシア民話
②	丹野てい子	命の水	ラング	ももいろの童話集	カタルーニャ昔話
③	鈴木三重吉	悪い狐	アスビョルンセン	北欧民話シリーズ	ノルウェー民話
④	丹野てい子	石臼と鹽の話	アスビョルンセン ラング	北欧民話シリーズ あおいろの童話集	ノルウェー民話
⑤	丹野てい子	どんぐり小坊 主	ラング リスロッキ（独語）	きいろの童話集	アルメニア民話
⑥	丹野てい子	がらすの山	ラング	だいだいろの童話集	ポーランド民話
⑨	鈴木三重吉	馬鹿	ラング	だいだいろの童話集	インド民話
⑩	野上豊一郎	灰色の小人	ラング クレトケ（独語）	はいいろの童話集	ドイツ昔話
⑱	小山内薫	平気の平左	イエイツ（ゲール 語）ハイド訳	アイルランドの昔話と 民話	アイルランド昔話

2. 出典として使用した文献の傾向

上記で示した出典文献を見ると、傾向が明らかになる。訳者たちは世界の民話を紹介しているが、各国の言語（ドイツ語、ゲール語、フランス語など）で書かれた文献ではなく、主として英訳された文献を使用している。とくにラングの英訳本『色の童話集』の採用が目立つ。アスビョルンセン版の英訳も存在するが、入手しにくかったのだろうか。ほとんどの場合、ラング版から採用し、重訳している。

「悪い狐」のみラング版には収録されていないので、アスビョルンセン編『北欧民話シリーズ』から採用したと推測する。底本としてラング版が多用される傾向は、グリム童話由来とした9話に関してもいえるのだろうか。次章ではそのことについて調査する。

第4章 拙論（1）の訂正箇所

1. グリム童話由来の話の出典文献一覧表【表5】

No	作(訳)者名	収録題名	文献 編訳者	話の題名 文献名	グリム童話題名
⑲	南部修太郎	小人の謎	ポレヴォイ ³⁶ (ロシア語?)	フラムシカ グリム兄弟の童話集	55 ルンベルシュテ イルツヒェン
⑳	野上豊一郎	ボビノが王様 になった話	ラング (英語)	ボビノ はいいろの童話集	33 3つの言葉
㉑	島崎藤村	小さな土産話 兎と針鼠	ウェーナート ³⁷ (英語)	野兎と針鼠 グリム：家庭の物語	187 兎と針鼠

②②	久保田万太郎	白い鳥の話	ラング (英語)	6羽の白鳥 きいろの童話集	49 6羽の白鳥
②③	小山内薫	イルゼベルの 望み	ラング (英語)	猟師とその妻の物語 みどりいろの童話集	19 漁師とその妻
②④	(小野浩) 鈴木三重吉	正直もの	ウェーナート (英語)	小人と靴屋	39-I 小人 I
②⑤	宇野浩二	不思議な金魚	ランサム (英語)	不思議な金魚	19 漁師とその妻
②⑥	大木篤(惇) 夫	蠟燭をつぐ話	フィルモア ³⁸ (英語)	命の蠟燭 チェコスロバキア昔話	✕ 44 死神の名づけ親
②⑦	(内藤三雄) 鈴木三重吉	猟師と金の魚	プーシキン ³⁹ (英語)	猟師とその妻 チェレプニン戯曲	19 漁師とその妻

2. 上記の表で「✕」印をつけた話

1) ②⑥大木篤(敦) 夫訳 蠟燭をつぐ話

拙論(1)ではこの話をグリム童話由来の話としたが、調査の結果、これはパーカー・フィルモア(Parker Fillmore, 1878-1944)によって再話されたチェコスロバキアの昔話「命の蠟燭 - ゴッドマザー死神が子の名付け親になる話」⁴⁰を底本として再話したものであることが判明した。この話は『靴屋のエプロン - チェコスロバキアの昔話と民話』に収録された話である。主人公の名が大木訳と同じマルティン[Martin]で、名付け親の「死」は女性で、地下でマルティンが自分の寿命を延ばすため、他の蠟燭を半分折ってつぎ足すエピソードも存在する。折った蠟燭が息子のものであった点も大木訳と同じである。しかし、マルティンが医者のもとで修行することや、薬草に詳しいことについては大木訳やグリム版には存在するが、この本には存在しない。したがって、グリム童話も混入して再話した可能性も考えられるが、主としてフィルモア版の「命の蠟燭」を底本として「蠟燭をつぐ話」として再話したものと判断する。その結果、グリム童話由来の話ではないことになる。拙論(1)で提示した結果をここで訂正する。つまり、グリム童話由来の話は9話ではなく、8話ということになる。

3. グリム童話由来の話に使用された底本

グリム童話に由来しない話と同様、ラングの英語版の使用が3冊と最も多い。次に多く使用されたのはウェーナートの英語版である。明治・大正期の「赤ずきん」の邦訳では、祖母の見舞いに「肉」を持参するものが6話存在する⁴¹。ウェーナートの英訳版が底本として使用されたからである。なぜなら肉[meat]を持参すると英訳しているのはウェーナート版だけだからである。なぜ肉を持参することにしたのかについては拙論⁴²で詳述しているので、そちらを参照してほしい。ウェーナート版の英訳本は挿絵が各話に入れられており、明治期や大正期にはグリム童話の底本として多くの邦訳者が使用したと考えられる。

ランサムやプーシキンの話もロシア語からではなく、英語訳を使って重訳している。チェコスロバキア昔話も英語訳からの重訳である。南部が訳した1話だけは、「フラムシカ」というロシア語が「ルンペルシュティルツヒェン」というドイツ語名の代わりに出てくる

ので、ロシア語から訳した可能性が高い。いずれにしても、前述のグリム童話由来でないとした話で使用された文献同様、主としてラング版やウェーナート版などの英訳版を底本として訳し、翻案したものと思われる。

結論

結局、『赤い鳥』にはグリム童話由来の話は、3人の先行研究では14話とされていたが、5話のみであり、9話はグリム童話由来の話ではないということになる。筆者による調査の結果、新たに3話が加わり、合計8話がグリム童話由来の話ということになる。拙論(1)では9話としていたが、そのうちの1話「蠟燭をつぐ話」がチェコスロバキア昔話に基づいたものであるということが判明したので、1話減少したのである。

『赤い鳥』にはノルウェー、ポーランド、アルメニア、アイルランドなど北欧や東欧の昔話、ロシアの昔話、チェコスロバキアの昔話、ドイツの昔話、インドの昔話など様々な国の昔話が再話されて収録されている。ただし、使用文献は主として英語版のもので、とりわけ、ラング版やウェーナート版のものが好んで使用されている。

『赤い鳥』に収録された話に見られる改変については以下のような傾向が見られる。イェイツ版では「娘は恋に落ちて」と表現されているのに、「娘はいろいろもてなして」という表現に変えられている。「恋」をしたからではなく、「もてなした」から結婚するのである。子どもを対象とする話に「恋」はご法度なのであろうか。また、男女が結婚して幸せになりましたという結末が、「兄弟姉妹4人で幸せに暮らしました」と改変され、恋愛結婚による男女の幸せではなく、兄弟愛による家族の幸せを強調した話に改変されている。さらに、「この世に戻れない」という表現が削除されているのは、あくまで「この世の話」であり、ガラスの山という「あの世の話」ではないという設定に固執したからであろう。おそらく、天国というキリスト教の価値観を排除したかったからであろう⁴³。

また、暴力による制裁を極力避ける傾向が見られる。ラング版では羊の番ができない馬鹿な若者は雇い主に「こっぴどく打ちのめされる」が、ただ「あきれられる」だけである。蠅を追い払おうと、ラング版では大きな石を投げて祖母に命中するが、ここでは皿を投げて祖母は気を失うだけである。ラング版では若者は「怒られるのが怖くて逃げ出す」が、「驚いて逃げ出す」と改変されている。体罰を与えたり、暴言を吐いたりする行為が削除されたり、和らげられたりしている。子どもに対する教育的配慮がなされた結果であろう。

『赤い鳥』は「子どもの教育」という視点から改変を加えて外国の昔話を読者に提供した。その目的は大正デモクラシーの教育理念「子ども中心主義の新教育」を定着させることである。教師が体罰を加えて知識を叩きこむ注入教育ではなく⁴⁴、子どもが自ら書いて綴方を学ぼうとする開発主義、児童中心主義の新教育が『赤い鳥』運動の目指すものだったのであろう。雇用主や師匠による暴言や暴力を排除したのは、上記のような新教育理念に基づいたものであろう。恋愛やキリスト教は避けているが、暴力もまた避けているところに「童心主義」を唱える大正デモクラシーの児童雑誌『赤い鳥』の斬新さがうかがえる。

注

- 1 拙論「『赤い鳥』のなかのグリム童話」『梅花児童文学』30号 梅花女子大学大学院児童文学会 2023年 11-25頁。以下この論文を拙論(1)と略記する。
- 2 渡辺茂男「『赤い鳥』と外国文学」日本児童文学学会編『赤い鳥研究』小峰書房 1965年 157-169頁。
- 3 王玉「雑誌『赤い鳥』における『殺す』『殺される』問題：欧米昔話再話作品を中心に」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』14号 2014年 83-104頁。
- 4 佐藤宗子『家なき子の旅』平凡社 1987年 16頁。
- 5 鈴木三重吉編『赤い鳥』第1巻 第5号 赤い鳥社 1918年 77頁。
- 6 丸尾美保「雑誌『赤い鳥』掲載のロシア関連作品の考察」『梅花児童文学』10号 梅花女子大学大学院児童文学会 2002年 69頁。
- 7 中村善和編訳『アフナーシェフ ロシア民話集 下』岩波書店 1987年 247-255頁。
- 8 Били́ бин, Ива́н Я́ковлевич, *Царевна-Лягушка*. Санкт-Петербург 1899.
- 9 The Wise Princess. In: *The Blue Rose Fairy Book* by Maurice Baring. New York 1911. 249-253.
- 10 赤い鳥事典編集委員会編『赤い鳥事典』柏書房 2018年 183頁。
- 11 ラングの色の童話集の日本語版は原本と一致しない内容のものが多い。2008年の東京創元社版の12冊は原本の内容とほぼ一致しているので、題名はその訳語を採用するが、内容は削除がみられる。本論では訳本ではなく、下記の英語版を拙訳して使用する。
- 12 Lang, Andrew, The Pink Fairy Book. In: *The Complete Fairy Book Series*. UK 2003. 348-349.
- 13 鈴木三重吉『鈴木三重吉童話全集』第2巻 文泉堂書店 1975年(第5版) 附言3頁。
- 14 Asbjørnsen, Peter Christen & Moe, Jørgen Engebretsen, *Tales from the Fjeld: A Second Series of Popular Tales from the Norse of P. Chr. Asbjørnsen*. London 1874.
- 15 *Tales of Laughter. A Third Fairy Book*. Edited by Kate Douglas Wiggin and Nora Archibald Smith. New York 1908. 312-313.
- 16 Asbjørnsen, Peter Christen & Moe, Jørgen Engebretsen : *The Complete and Original Norwegian Folktales of Asbjørnsen and Moe*. Translated by Tiina Nunnally. Minnesota 2019. 228-231.
- 17 Lang, Andrew, The Blue Fairy Book. op. cit.,(note 12) 33-34.
- 18 桑原三郎『鈴木三重吉の童話』私家版 1960年 170頁。
- 19 Lang, Andrew, The Yellow Fairy Book. op. cit.,(note 12) 294.
- 20 Wislocki, Heinrich von, *Märchen und Sagen der Bukowinaer und Siebenbürger Armenier*. 2022 Books on Demand (Originalausgabe 1891). 43-46.
- 21 Ibid., 45.
- 22 Lang, Andrew, The Yellow Fairy Book. op. cit.,(note 12) 271-272.
- 23 Kletke, Hermann. *Märchensaal – Märchen aller Völker für Jung und Alt*. Berlin 1845. 106-108.
- 24 Lang, Andrew. The Orange Fairy Book. op. cit.,(note 12) 657-658.
- 25 2023 Fairytales.com : The Foolish Weaver. Andrew Lang's Fairy Books. August 12, 2015. Indian
- 26 “the nearest stone, which was a big, heavy one, and dashed it at the flies; but unhappily, he slew the poor old woman also.” Lang, Andrew, The Orange Fairy Book. op. cit.,(note 12) 657.
- 27 Ibid
- 28 Ibid. 658. “When the weavers found that there were seven of them they were overcome with gratitude to one whom they took for a magician as he could thus make seven out of an obvious six.”
- 29 Lang, Andrew. The Gray Fairy Book. op. cit.,(note 12) 401-402.
- 30 Kletke, Hermann. op.cit. (note 23) 215-217, hier 215.
- 31 赤い鳥事典編集委員会編『赤い鳥事典』前掲書(注10) 202頁。
- 32 佐藤宗子 前掲書(注4) 16頁。

- 33 鈴木三重吉編『赤い鳥』1巻12号 通信欄(相模国 国府津 一読者) 1918年 76頁。
- 34 佐藤宗子 前掲書(注4) 16頁。
- 35 *Irish Fairy Tales*. Edited by William Butler Yeats. Illustrated by Jack B. Yeats. London 1892. 124-139.
- 36 Пётр Николаевич Полевой: *Сказки, собранные братьями Гримм*. Санкт-Петербург: Издание А. Ф. Маркса 1895. 184-189.
- 37 *Household Stories*. Collected by the Brothers Grimm. Newly translated. With 240 illustrations by E. H. Wehnert. Complete in one volume. London.1853. 794-797.
1891年 愛柳子譯(坂下龜太郎)が上記の英訳本を使用して訳したことは下記の拙論で詳述している。「グリム童話「ルンペルシュティルツヒェン」の明治期から大正期の翻訳」『梅花児童文学』29号 2022年 23頁。また西口拓子が『挿絵でよみとくグリム童話』(早稲田大学出版部 2022年)で初期の翻訳者の多くがウェーナート版を使用していることを挿絵から明らかにしている。1919年4月までに出版されている英語訳でこの話を含み、最初に「祖父の話」というエピソードが付いているのは、調査の結果、1853年と1857年出版のウェーナート版のみであった。
- 38 Fillmore, Parker, *The Shoemaker's Apron. A Second Book of Czechoslovak Fairy Tales and Folk Tales*. New York 1922.
- 39 *The Fisherman and the Fish by Nikolai Tcherepnin, op. 41 for orchestra*, 1921.
6 Musical Illustrations after the Pushkin Tale.
- 40 *The Candles of Life: The Story of a Child for Whom Death Stood Godmother*. Fillmore, Parker, *The Shoemaker's Apron*. op.cit.,(note 38) 197-206.
- 41 明治期には4話(12冊中)、大正期には2話(16冊中)存在する。詳細は拙論参照。拙論「日本における「赤ずきん」の受容—明治・大正期を中心に」日本昔話学会編『昔話—研究と資料』47号 2019年 79-93頁。
- 42 同上 84-85頁。
- 43 キリスト教の概念、「アーメン」や「アヴェ・マリア」が削除されていることに関して、佐藤宗子は前掲書で「宗教に関しての不注意」(31頁)としているが、筆者は積極的な排除であると考え。明治期に「キリスト教徒による不敬事件」が勃発し、「キリスト教は日本の国体には適合しない」とする考え方が天皇制を支持する教育関係者の間で共有されていたので、排除したと考える。
- 44 当時の東京朝日新聞には「教師に撲られたが因で生徒死す」(大正5年5月9日)や「小学教師生徒を蹴殺す」(大正13年8月17日)など、学校現場での教師の暴力行為が数多く報告されている。